

「とっどりの評判記」

第5話

なんでも

鳥取砂丘に行ってみよう!



やまびこ博士：今日は鳥取市一番の観光名所、鳥取砂丘に来てみました。

こだまちゃん：わあ、人がいっぱい。みんな砂丘を見に来たのね。

やまびこ博士：鳥取といえば砂丘、砂丘といえば鳥取。日本中の人知っている「鳥取砂丘」は、千代川左岸の湖山砂丘と右岸の浜坂砂丘・福部砂丘をあわせた、東西16キロメートル・南北約2キロメートルほどの地域だよ。ここは、そのうちでも「浜坂砂丘」とよばれる場所で、観光客がいちばん多く集まるところだよ。

こだまちゃん：でも、どうして鳥取砂丘はこんなに有名になったのかしら。

やまびこ博士：昔から地元の人「浜出」といって見物に行っていたようだけれど、鳥取砂丘は、はじめから全国的な観光名所だったわけではない。むしろ、住むこともできず、農地にもならないうえ、そこから飛ぶ砂で作物に被害を及ぼす困った存在だった。それが全国的に有名になりはじめたのは、明治になってからのことだ。

こだまちゃん：何がきっかけだったのかしら。

やまびこ博士：明治31年、大野雲外おののうんがいという人が『東京人類学雑誌』に砂丘の遺跡に触れた文章を掲載した。これが、全国に鳥取の砂丘が紹介された最初の例だと言われている。

こだまちゃん：はじめは古代人の遺跡のある場所として注目されたのね。

やまびこ博士：大正時代になると地質学者や農学者が砂丘の独特な自然環境に目を向けるようになり、地元の研究者による調査も行われた。研究が進むにつれ、砂丘の利用方法も考えられるようになってきた。

こだまちゃん：私の大好きな、らっきょうや長いものような砂丘作物が作られはじめたのもこの頃からののね。

やまびこ博士：長年に渡る努力の結果、鳥取の砂丘地の農業利用に関する研究水準は、現在では世界レベルのものとなっている。それに、研究が進むにつれ、砂丘には農業地として利用する以外の価値があることもわかってきた。神秘的な風紋、独特の動物や植物たち、壮大な景観……。砂丘の存在そのものが、大自然の驚異だということだ。

こだまちゃん：なんとなくぼんやり眺めているだけでも気持ちがすっきりするものね。

やまびこ博士：植田正治うえだしょうじ（写真家）やバーナード・リーチ（画家・陶芸家）など、多くの芸術家たちが、砂丘と触れ合うことですぐれた作品を残している。このすばらしい砂丘を多くの人に知ってもらうため、昭和の初めごろから、鳥取の人たちは本格的に砂丘観光の開発に取り組みはじめた。道路の整備や京阪神に向けての宣伝、サンドスキー大会（昭和8年）などのイベントの実施。昭和10年には大阪から湖山池に水上機が飛ぶようになって、全国レベルの観光地になった。

こだまちゃん：今、鳥取砂丘が観光名所になっているのも、このときの努力が実ったからなの？

やまびこ博士：残念ながらこの時代の観光開発は、戦争の影響や鳥取大震災（昭和18年）などで中断してしまう。けれども、農地開発と同様、その記憶とノウハウは完全に失われたわけではなかった。

こだまちゃん：みんながあきらめずに頑張ったのね。

やまびこ博士：砂丘はよく「天から恵まれた宝物」といわれる。しかし、人々の守り育てる努力があって、初めて今のような姿になったんだ。

こだまちゃん：私も鳥取砂丘のために、なにかできないかしら。

【佐々木孝文（鳥取市歴史博物館学芸員）】